

モザイク化する人間集団の新たな価値の創出

センター研究員（東京大学教育学部附属中等教育学校教諭） 橋 本 渉

多くの教員は、教育観を自己の内に形成し、日々現場での授業やその他の教育実践に励んでいる。その教育観は、学校現場における他の教員との関係や生徒との相互的なかかわりから形成されたものであり、過去に遡れば今日に至るまでのそうしたかかわりの積み重ねと言える。更に遡れば、大学等の知的な研究過程や何よりも教員個々の子ども時代の学習者としての経験も大きく関係しているだろう。我々は自己の経験の上に現在の教員としての生の姿があり、その経験こそが自信と行動への原動力を形作っているのかもしれない。しかし、そうした多様な経験から生み出される教員個々の価値観は、実際、硬直化したものとなっている。

教員相互の教育観が同じ現場に身を置きながら交わることなく、日々の教育活動が続いている。教員は他者に対して否定的であることが多く、新たに提案される試行的な試みに対してその受容に積極的ではないところは、教員個人の教育観が絶対的な正義によって揺るがないことにある。それは、まさに積み重ねられた経験からくる自信であり、愛着であり、自己の譲らない正当性なのである。我々はどれほど他者の意見に耳を傾けたであろうか。我々は、研究会、著作物、同僚の意見を情報として摂取している。しかし、それらは、取り入れても自己の経験の文脈に合致するものを取り入れたか、都合の良いように解釈している可能性がある。でなければ、職場内での硬直した関係と価値観の交流の乏しさは生じないはずである（冒頭で述べた教員間の相互的なかかわりは、都合のよい他者との間に制限されていると言ってよい）。交流と言っても刹那的な辻褄を合わせる表面的な議論となりがちであり、虚しさを感じざるを得ない。教員は、誰からも自己が受け入れられない孤独を感じている。しかし、裏を返せば、そうした状況は、我々自身の知と心の閉鎖性に起因するものであり、その克服が課題となる

ことは言うまでもない。こうしたことは、対教員のみならず、授業を通して生徒の素朴な意見や保護者の声を受け入れないでいることも可能性として存在し得ると考えておかねばならない。それでは、その克服は、個々が自己の正義（価値）を放棄することによって成し遂げられるのだろうか。自己の正義（価値）を相対化し、他者の正義を取り入れることにその解決を見出すのだろうか。

自己が否定された上での新たな価値観の摂取は、そう容易なことではない。お互いは、積み重ねられた自己の経験そのものの否定にまで繋がることを嫌悪するからだ。むしろ、その打開は、個々が所有する経験の一部を新たな局面を迎えた段階で他者と共有することから始まる。個々の経験は、その時、共同作業を通して再検討されてゆく対象となる。それを可能とするには、我々に前提となる姿勢が求められてくる。それは我々に共同の経験を通して共同の記憶を作り上げようとする姿勢であり、他者の経験をも共同の資産として個々が認めよう、活用しようとする姿勢である。個々の経験から生じる異なる価値観を共同のものできたとき、相異なる矛盾をお互いが自己に取り入れることができ、共同で再び確かめる作業ができるようになる。そして、我々は、そうした手間を惜しまないことだろう。

この一連の過程は、自己の価値観の放棄を意味するものでは決してない。むしろ共同の中に新たな価値観を創出する行為であり、新たな価値観を自己のうちに取りこむ過程でもある。また、そうして獲得された価値観は、いずれは新たな他者との共同作業の中で新しい価値ともに変容する可能性をひめたものとなってゆく。

現在、東京大学教育学部附属学校は、東京大学教育学部の学校臨床総合教育研究センターとの連携を図っている。お互いが異なる価値観を交流させ、共同作業から新たな価値観の創出を期待したいところである。